

2000年度

ムーブメント教育夏期セミナー

発達と療育を援助する実践講座

<徳島会場>

と き：2000, 7, 22~23

ところ：徳島県立二十一世紀館（文化の森）
多目的活動室

主催：日本ムーブメント教育・療法協会

徳島会場

発達と療育を援助する実践講座

7 月 22 日 (土)	徳島県立二十一世紀館 多目的活動室
13:00	<受付>
13:30 14:30	<ムーブメント実技> 動きをとおして子どもたちに喜びを① 飯村 敦子
14:45 15:45	<実技を振り返って> いかにムーブメント遊具を活用するか 小林 芳文
16:00 17:00	<実践報告> ①鳴門教育大学附属養護学校での実践 ②徳島県立阿南養護学校での実践

7 月 23 日 (日)	徳島県立二十一世紀館 多目的活動室
9:00	<受付>
9:30 10:30	<ムーブメント実技> 動きをとおして子どもたちに喜びを②
10:45 12:00	<グループワーク> ムーブメント遊具の活用法 細川 貴規
	<昼食>
13:00 14:15	IEPとIFSPに生かすMEPAの活用 -個別教育と個別家族サービス計画- 小林 芳文
14:30 15:45	<実技> 動きを育てる音楽ムーブメント 飯村 敦子
15:45 16:15	<質疑応答>

会場：徳島県立二十一世紀館（文化の森） 多目的活動室
徳島市八万町向寺山

定員：90名

受講料：一般 10,000円 会員 9,000円

7/22 13:30～14:30

《ムーブメント実技》

動きをとおして子どもたちに喜びを①

東京福祉大学助教授
JAME 専門指導員 飯村敦子

ムーブメント教育は、Moving(動くこと)、Thinking(考えること)、Feeling(感じること)により、子どもの全面的な発達を支える「遊びを原点とした発達教育」としての意義を持っています。その活動は子ども中心に展開されるので、子どもは、楽しく動くこと(ムーブメント)をとおして、自分を知り、考え、解答し、環境への適応力を高め、喜びや達成感を得ることができます。

ムーブメント教育におけるリーダーの役割は、一人一人の子どもを大切に、その発達を考慮しながら、動きの起こりうる環境を提供して、魅力的な問いかけを繰り返し、活動の舵取りをすることであるといえましょう。

実技に参加する子ども達は、いつもとは異なる環境の中で、少し緊張しているかもしれませんが、そこで、保護者の方々や研修会に参加された方々にもご協力をいただきながら、様々な遊具や音楽を用いて、人と人とが関わり、「からだ」と「あたま」と「こころ」の参加する楽しいムーブメントを展開したいと思います。

*** ムーブメントのプラン ***

ムーブメントのプランは、次のような流れを考えています。子ども達の表情や動きを大切に、柔軟に進めたいと思います。また、子ども達のパフォーマンスには、暖かな拍手をお願いします。皆さんの大きな拍手は、子どもの心を満足感と充実感で満たし、パフォーマンスへの勇気の源となることでしょう。

1) フリームーブメント

フリームーブメントは、子ども一人一人が環境に慣れてリラックスすること、また、集団でのムーブメントへの導入として大切な時間です。

* ユランコやバギーなどでつくる「揺れ」の環境

* 子ども達が自由に関わることのできる環境

2) 集団でのムーブメント

遊具が人と人をつなぎ、新たな動きの風景が生まれます。

* 挨拶

* 感覚運動・知覚運動ムーブメントを中心に

ロープ（又はプレイバンド）、音楽や楽器などを用いて

3) エンディング

楽しさに余韻を残して… 子ども達を夢の世界に誘います。

* コミュニケーションとファンタジーを支えるために

7 / 22 14:45~15:45

《実技を振り返って》

いかにムーブメント遊具を活用するか

横浜国立大学教授
協会顧問 小林 芳文

子どもたちにとって、ムーブメント教育が発達に役立つこと、特に、障害を有する子どもに多くの利益をもたらしていることが知られている。ここでは、前のセッションの実技を振り返って、ムーブメント教育を進めていく上での必要な遊具に視点を当て、それがどのように活用されているのか考えてみたい。

1. 実技中での子どもの様子について

- 1) どのような場面で生き生きとしていたか
- 2) 大勢の人とどのような関わりがあったか

2. 遊具の役割について考える

- 1) どのような遊具が、使われていたか
 - ① 感覚、知覚に関わる遊具について

②粗大運動に関わる遊具について

③操作運動に関わる遊具について

④コミュニケーションに関わる遊具について

2) 遊具がどのような場面で使われていたか

①全員が集まる時

②活動を活発にする時

③体の揺れを楽しむ時

④ファンタジーを支える時

3. ムーブメント教育と環境としての遊具について

7/22 16:00 - 16:30

〈実践報告〉

ムーブメント遊具を取り入れたリズム運動の実践

鳴門教育大学学校教育学部附属養護学校 小学部主事 国広 松代

1. リズム運動のなりたち

2. リズム運動にムーブメント遊具を取り入れて良かった点

3. 実践の様子（VTR）

4. これからの課題

〈実践報告〉

高等部におけるムーブメントの取り組み

～肢体不自由がある生徒に対する取り組み～

徳島県立阿南養護学校 山崎仁寛

1. はじめに

(1) 阿南養護学校高等部の概要

阿南養護学校高等部は、普通科と職業科の生活科学科、産業工芸科の合わせて3つの学科がある。今回ムーブメントを実施した普通科は『「作業学習」の充実を図り、働く意欲と資質を高め、社会参加・自立のための基本的な能力を養う』を目標に掲げている。この目標を受け、個々の生徒の能力・技能、行動特徴などのアセスメントを実施し、一人ひとりに応じた最適な指導目標及び指導の手だてを設定する「個別の指導計画」を実施している。

(2) 高等部におけるムーブメントの位置づけ

高等部普通科におけるムーブメントは、平成11年度より始まったばかりであり、実施する時間帯、内容などすべて初めての試みであった。ムーブメントは週2時間の体育の時間に行った。巧緻性、敏捷性、リズム、平衡感覚、協応動作の面からムーブメントを継続して実施するのが望ましいと判断した生徒をムーブメントグループとして編成した。

2. 実践内容

(1) 概要

今回、1年間のムーブメントを実施するにあたり、学期毎に大きなテーマを設定した。1学期はパラシュート、2学期はボール及びサーキット、3学期は缶積みと、大きな体の動きから手先を使った活動へと変化をもたせた。その中で、一人ひとりに応じた課題を設定し、教師からのアプローチを様々変え、内容を固定化せず、活動が定着し始めてきたら徐々に難易度を上げ、発展的に課題に取り組ませるようにした。

(2) 生徒の実態と実践内容

今回のこのムーブメントグループは自閉症2名、精神発達遅滞2名、肢体不自由を併せ持つ重複障害2名、内臓疾患を含む者1名の計7名で実施した。この内1名は一人での独立歩行が不安定であり移動には教師の介助を要する生徒である。このように対象生徒の障害程度や実態も様々であり、実際にムーブメントを行うに当たっては一人ひとりの課題設定と手だてを工夫するなどの細かい配慮が必要であった。

(3) 個別の指導計画を生かしての取り組み

本校では平成9年度より「個別の指導計画」に関する研究が始まり、昨年度（平成11年度）は実践時期にあった。アセスメントや保護者の希望により年間を通じての目標を決定し、それに基づいて学期毎の目標を設定して授業を展開する流れとした。その中でムーブメントの考え方と技法を取り入れた個別の指導計画を立案・実践した。

3. 実践例

(1) 筋緊張の強いB男君に対する実践

- ・パラシュート

- ・ボール、サーキット

- ・缶積み

(2) 独立歩行が不安定なA子さんに対する実践

- ・パラシュート

- ・ボール、サーキット

- ・缶積み

4. まとめ

年間を通じ、週2回ではあるが継続してムーブメントを実施した。MEPAⅡのプロファイル表に表されているように多くの領域で伸びが見られた。両生徒ともそれぞれ重点的に取り組んだ領域では大きな伸びが見られ成果があらわれている。しかし、重複障害の生徒ということで養護・訓練の授業時間数が多いため、ここで見られる伸びにムーブメント教育がどの程度寄与したのかの検証が難しい。またムーブメントの目標に掲げていたコミュニケーション面での伸びが少なかったことを考えると、アプローチに改善の余地があると思われた。

5. 今後の課題

- (1) 個々の生徒の的確な能力・特性の把握
- (2) 年間を通じたの課題設定
- (3) 教職員の共通理解

~MEMO~

7/23 9:30 - 10:30

<ムーブメント実技>

動きをとおして子どもたちに喜びを②

鳴門教育大学学校教育学部附属養護学校 小学部教諭 猪子 秀太郎

1. 道具を使わないリズム運動

2. ムーブメント遊具を取り入れたリズム運動

・フープ

・ロープ

・パラシュート

・その他

ムーブメント遊具の活用法

千葉県立長生養護学校 細川貴規

【ムーブメント教育の基本的な考え方】

「ムーブメント教育」とは「動き」そのものを学ぶ、「動き」を通じて学ぶ「発達教育」です。楽しく動くことで、あたま（認知面）を育て、からだ（身体面）、こころ（情緒面）を育てます。そして活動の中に遊びの要素をふんだんに取り入れて楽しく身体を動かすことで、子ども（もしくは青年期の）健やかな発達を支援するのです。ですからムーブメント教育は訓練ではありません。子どもの自主性・主体性を大切にする教育なのです。

楽しく子どもたちと身体を動かすためには、子ども個々の様子やそのねがい、集団の人数などを考慮して、場にあった遊具を活用した方がより楽しく、効果的です。

今回のグループワークでは、みなさんと一緒にムーブメント教育における遊具の活用法について一緒に考えていきたいと思えます。

【感覚運動期の子どもたちを中心とした遊具の使い方】

主に肢体不自由（車椅子など）のお子さんや発達段階が初期のお子さん（知的発達障害も含む）を対象にした運動です。主に跳んだり・はねたり、ロープを引っ張ったり、走ったり、揺れたり、滑り降りたり・・・などの活動を言います。

特に「揺れ」を使った動き（前庭感覚）は、脳幹を刺激し、呼吸・睡眠のリズムを整えたり、バランス感覚を養うことができ、適度な運動刺激を簡単に用意することができるので、車椅子のお子さんなど一人で動くことが難しい場合など、とても大切な動きなのです。

【感覚運動をすすめていく上でのいくつかのキーワード】

- ① 「揺れ」・・・その3つの方向性・・・「縦」、「横」、「回転」
- ② 「ものを引っ張る」・・・
- ③ 「加速度」を感じる喜び・・・
- ④ 「ものに触れる」・・・

【知覚運動・精神運動期のこどもたちのを中心とした遊具の使い方】

知的な発達を促す感覚として知覚能力に対する運動の必要性は多くの人の知るところです。特に学校においては学習活動の基礎として知覚の発達は欠かせないものです。知覚運動には感覚運動に様々な要素が加わります。色であるとか、速い・遅いといった時間的な要素、空間への意識やその方向性など……。これらのプラスされた内容を十分に行う必要があるのです。この知覚運動を行うことが教科学習の基礎となるからです。

精神運動とは知覚運動運動の上にあるもの、つまり子ども自身が考え、そして答えを出して動く、そういった一連の運動を言います。

【知覚運動をすすめていく上でのいくつかのキーワード】

- ① バランスと姿勢
- ② 移動
- ③ 接触
- ④ 受容と推進
- ⑤ 視覚と運動の協応

【精神運動をすすめていく上でのいくつかのキーワード】

- ① ムーブメントクエスチョンとムーブメント・アンサー
- ② 答えはすべて100点！

《講演》

IEP と IFSP に生かす MEPA の活用 －個別教育と個別家族サービス計画－

横浜国立大学教授
協会顧問 小林 芳文

1. IEP (個別教育計画) について

- 1) アメリカでの IEP、すべての学齢障害児に特殊教育を
 - ・ 1975年の連邦法（全障害児教育法、EHA、PL-94-142）
 - ・ 一人ひとりに応じた教育の補償（特別な教育ニーズ (SEN) を支援）
- 2) 教育計画の考え方
 - ① 現在の子どもの実態把握
 - ② 長期（年間）、短期（学期）の目標
 - ③ 関連サービスをどのように取り入れるか（地域、福祉）
 - ④ ライフステージに応じた教育のビジョンはあるか、QOLに向けた教育
 - ⑤ アセスメント特性を理解しているか
診断 - 指針

2. 横浜国大附属養護学校での個別教育計画 (IEP) の考え方

子ども一人ひとりの豊かな人間性の育成をめざし、全職員における共通理解と保護者との密接な協力体制のもとで IEP を作成している。

(小学部、中学部、高等部の IEP の作成から分かったこと - 成果)

- ・ 個々の課題の明確化
- ・ 生徒一人ひとりの理解が、学部の教官に行き渡ったこと
- ・ 新たな課題の発見、ライフステージの考え
- ・ 父母との協力体制が得られたこと

3. I F S P (Individualized Family Service Plan 個別家族サービス計画)

1) 米国の流れ

米国では、1986年の改正法(PL99-457)により個別家族サービス計画の考えが広がった。これがIEPと結びつくことで真の意味で家族に支援できる流れが作れた。

1991年全障害児教育法(EHA)は、IDEA (Individuals with Disabilities Education Act 障害者教育法)に名称変更した(PL102-119)。この改正法は、様々な意味で乳幼児や家族へのサービスの具体的な支援を義務づけた。

- ・ムーブメント教育などのプログラムの重要性が叫ばれた。

(注；日本では米国に先駆けて1985年にMEPAが誕生した。)

2) ムーブメント教育が持つIFSPにふさわしい条件

- a) 楽しんでできること
- b) 柔軟であること
- c) 包括的であること
- d) 発達に効果があること

4. 家庭と学校ができるムーブメント教育：MEPA (ムーブメント教育プログラムアセスメント) について

1) ムーブメント教育：「楽しい動き作り、動きを通しての教育」

2) MEPAの構成

- ・領域：「こころ、からだ、あたま」の行動全体のアセスメント
- ・ステージ：運動発達7ステージ(0～72ヶ月レベル)

3) MEPAプロフィールの読み方(指導の特徴をつかむために)

- ・Aパターン；全体的に第3ステージ(18ヶ月以下)
感覚運動プログラム、身体意識(身体像)プログラム
- ・Bパターン；第4ステージ(36ヶ月)周辺

- 知覚運動プログラム、身体意識（身体図式）プログラム
- ・ Cパターン；運動領域が低く、言語・社会性領域が高い
情緒、社会性を配慮した指導、感覚運動プログラム
- ・ Dパターン；運動は5、6、7ステージに対し、言語・社会性が低い
知覚運動を軸にコミュニケーションに関わるプログラム
- ・ Eパターン；ほぼ第7ステージ（72ヶ月）に位置
創造的ムーブメントプログラム

5. 子どもの運動発達ステージ

第1ステージ（反射支配ステージ）	0～ 6ヶ月
第2ステージ（前歩行ステージ）	7～12ヶ月
第3ステージ（歩行確立ステージ）	13～18ヶ月
第4ステージ（粗大運動ステージ）	19～36ヶ月
第5ステージ（調整運動ステージ）	37～48ヶ月
第6ステージ（知覚運動ステージ）	49～60ヶ月
第7ステージ（精微細運動ステージ）	61～72ヶ月

4. 連携している指導プログラムでの指導目標を定める

「乳幼児と障害児発達指導ステップガイド」

《実技》

動きを育てる音楽ムーブメント

東京福祉大学助教授
JAME 専門指導員 飯村敦子

ムーブメント教育・療法において、音楽は、はかりしれないほどの役割を果たすと言っても過言ではないでしょう。音楽は、人間の心にダイレクトに働きかけ、動くことの喜びを感じるために、とても重要な要素です。例えば、歩く時や走る時、そこに軽快な音楽が流れていることで、その動きは活性化されます。そして、これらの基本的な動き（歩くこと・走ること）が、喜びに満ちた楽しいムーブメントになるといえます。しかし“音楽ムーブメント”として展開するには、音楽や音の使い方には慎重でなければならないと思います。子どもの動きを中心に、その動きを助けるような、動きの中から生まれ出てくるような音楽や音を用いることが大切です。「何のために音楽や音を用いるのか」「どのような方法で（どのような種類の）音楽や音を用いるのか」、そして、「用いた音楽や音は適切であったのか」これらの点について考え、整理していくことで音楽ムーブメントが有効に機能するといえます。

音楽は、人間の様々な身体的反応を引き起こす機能を持っているといわれます。ここでは、「動きを育てる」ことをメインテーマに音楽ムーブメントを進めたいと思います。

動きを育てるための音楽ムーブメントの考え方

～ムーブメントと音楽の関係から～

音楽の構造と動き

音楽の特性と情緒的反応

《実 技》

・主として上肢のゆっくりとした動きづくりのために

・基本的な動きづくりのために

移動機能

姿勢機能

操作性機能

・時間、空間、方向性、コミュニケーションが関わる動きづくりのために

・心の解放、リラクゼーションを目指して…

以上の側面から、いくつかの楽器（音）による即興、既成の楽曲などによる音楽を用いて、デモンストレーションを行います。